

し、其後黄石公に兵書を授かりしころより、道を得たるにや、後に漢の高祖に従て、高祖の手をかり、秦を亡ぼして君の仇を報い、又其後楚の項羽、韓の子孫を亡ぼしたるに、これ亦高祖の手をかりて項羽を亡ぼして、再び君の仇を報い、つひに一度も己が手を下すことなし、これ誠にこの章の意を善く會得して、大匠に代りて削ることをせざるなるべし、

### 七十五章

〔章意〕 この章は、國を治むるに、淡泊無欲ならざれば、亂を生じ、身を持するに、淡泊無欲ならざれば、生を喪ひ、いづれもその害あることをのべ戒むるなり、

民之饑。以其上食稅之多。是以饑。

〔解義〕 それ食は民の手より出来るものにて、彼その本なれば、食に乏しくして饑ゆることは有るまじきことなり、然るに民の饑ゆるに至るは、其上たる人の年貢を多くとりて、民は我手にて作り得たるものは、みな上に奉りて乏しくなるが故に、是を以て饑ゆるに至るなり、以上本 文を誤むかしより、民より聚斂して、窮乏の餘、あつまりて群盜となれること多し、秦季の亂、明末の流賊等も是れなり、その終りみな天下を亡ぼすに至る、唐の太宗曰、民の物とるは、己が股を割て食ふが如し、一旦腹は充つれども、身亡ぶるなりと、みなこの理によることなり、

民之難治。以其上之有爲。是以難治。

〔字訓〕 有爲は、無爲なること能はずして、智慧にて治むること



なり、

〔解義〕 それ民は田畝を耕して力作を業とするのみにて、もとより無智なるものなり、然るにその民の邪智奸曲にして、治め難きに至ることは、其上たる人、有爲にして智術權譎を以て治むるにより、是を以て民亦狡猾になりて、治め難きに至るなり、

民之輕死。以其求生之厚。是以輕死。

〔字訓〕 生は生養なり、

〔解義〕 すべて生とし生るもの、その命を惜まざるはなし、然るに民の輕々しく命を喪ふに至ることは、各その生養を求むることの厚くして、富貴榮耀を貪り、智を役ひ身を勞し、利を營み禍を忘るゝにより、是を以て輕々しくその命を喪ふに至るなり、

り、

夫唯無以生爲者。是賢於貴生。

〔解義〕 それ只其身の生養を、有るに任せて何ともすることなく、清淨無爲なるものは、其生養やすくして命を喪ふの憂なく、生養を貴び旨とする者よりは遙に賢れるなり、されば萬の利害みな我によることなり、

### 七十六章

〔章意〕 この章、血氣の強を戒む、血氣の強は、所謂暴虎馮河の類にて、無分別なることなり、武勇とは似たることの似ぬことなり、能く思ひわけて混同すべからず、水戸義公の



詞に、無分別入におちよと、この類の人のことなり、

人之生也柔弱。其死也堅強。萬物草木之生也柔脆。其死也枯槁。故堅強者。死之徒。柔弱者。生之徒。

〔解義〕 すべて人の生る時は、其體屈伸も自由にして柔弱なり、その死したるときは、其體堅強なり、萬物草木の生るときは、柔脆なるものなり、その死れたるときは、堅強なり、柳の枝に雪折れなしと云も、生にてしなやかなる時のことにて、枯木となりては、堅強にして寸々にも折るべきなり、かゝる道理を以てみれば、凡そ堅強は死する方のことなり、柔弱は生くる方のことなり、

是以兵強則不勝。木強則共。

シキニシキトナリ

〔字訓〕 共はくみ合はするの意、

〔解義〕 是を以て兵強きは、威を奮ひ、人懐かずして、終に勝を得ものなり、木の強きは、土臺となり、棟となり、種々柱を組み合はせたる下となりて、壓さるゝものなり、

強大處下。柔弱處上。

〔解義〕 物の常理に於て、強大なるものは在下、樹木の根、柢は、強大なるが故に下にあり、柔弱なるものは在上、樹木の枝葉は、柔弱なるが故に上にあるなり、以上本文を説きたれば、後藤又兵衛が虎をきる、きることとはきりたり、仁者にはあらず、佐々木三郎が藤戸の海を渡す、渡すことは渡したり、智者にはあらず、これみな人の下となりて使はるべき一騎がけの武者にして、上に立ちて



人を使ふの任に勝ふる人にあらず、かく云へば武勇いかんと云者あらん、そは又別のことなり、こゝは只人の上となり、武勇の士を使ひ玉ふ人の心得を教へたるなり、

### 七十七章

〔章意〕 この章、天道の妙を述べて、聖人天に法とり用を制し玉ふことを云なり、

天之道。其猶張弓。與高者抑之。下者舉之。有餘者損之。不足者補之。

〔解義〕 天の道は、それ猶弓を張るが如きか、弓を張る者は、附の高きを抑へ、弭の下きを揚ぐるなり、天の道の萬物に於けるも、高きものは抑へ玉ひ、滿は損を招くなり、下れる者を舉げ玉ひ、

謙は益を受くるなり、有餘ものは損し玉ひ、月盈てば缺くる如し、不足なる者は補ひ玉ふ、初月の漸々に増す如し、

天之道。損有餘而補不足。人之道。則不然。損不足以奉有餘。

〔解義〕 天の道は、有餘ものは損し、不足なるものは補ひ玉ふなり、然るに人のする道はそれと異なり、貧窮せる民よりいよいよ取り上ぐるは、不足を損するなり、君は富みて倉庫に財有餘を、いよく取り上げて身に奉がふは、有餘に奉ずるなり、

孰能損有餘以奉天下。唯有道者。

有餘上。今本無損字。今從古本。

〔解義〕 今戰國の折柄にして、無道の世なり、誰かよく倉庫に有餘財を以て、天下萬民を恤むものあらん、財散すれば民聚る、天



下の人心歸服して、その國いよく繁昌なるべきなり、あつて  
れたゞ有道者のみなしつべし、かゝる今の世には、有りがたか  
るべし。

是以聖人爲而不恃。功成而不處。其不欲見賢。

〔解義〕 こゝを以て聖人は天下に有爲れども、己が智を恃にし  
て手を下し玉はず、功分成就れども、その場に居玉はず、其賢をあ  
らはすことを好み玉はずして、謙遜を旨とし玉ふなり、前に所  
謂有道者とは、かゝる聖人その人なり。

### 七十八章

〔章意〕 この章は、通篇柔弱の用を云の結局なり、柔弱とは卽温

柔なることなり、武暴になきことなり、謙遜のことなり、固より  
癡人臆病のこと、非ず、後漢の光武帝、我天下を治むる、柔道を  
以てすと云、此章の旨と符合せり。

天下莫柔弱於水。而攻堅强者。莫之能勝。以其無以易之。

〔解義〕 天下に柔弱なるもの多くあれども、水ほど柔弱なるも  
のはなし、然れども堅強なるものを攻むるに、水に勝るものな  
きは、水に易ふべきものなく、水にかぎれるによる、木の堅くし  
て切りがたきも、水に浸せば柔かなり、革の強くして断ちがた  
きも、水に漬せば軟かなり、石の堅きも、水にて穴あき、堤の固き  
も、水にて壊る、これその強に勝ち剛に勝る様を知るべし。

弱之勝強。柔之勝剛。天下莫不知。莫能行。



〔解義〕 されば弱の強に勝ち、柔の剛に勝つての理は、みやすきことにして、天下人々知らざるものなし、然れども亦能く行ふものなきなり、

是以聖人云。受國之垢。是謂社稷主。受國之不祥。是謂天下王。

〔字訓〕 國の垢とは、よごれなり、みぐるしきなり、王侯自ら孤寡不穀と稱し玉ふ類を、受國之垢と云、社稷主とは、社は土の神を祀り、稷は五穀の神を祭る、この二つ國に於て大切のみやなり、故に社稷の主とは、直ぐに國君のことなり、祥は善と訓す、不祥とは上の垢と云に同じ、只韻により文字を換へ、くり返して云のみ、

〔解義〕 それかるが故に古聖人の金言に曰、己よきものにならんとせずして、その身に國の垢をうけ、自ら孤寡不穀のかずならぬものと名のり玉ひ、身をひき下げ玉ふ人、これぞ社稷の主にして、尊き一國の君と謂ふなる、その身國の不善を引きうけ、自ら孤寡不穀のよからぬものと名のりて、その身を謙り玉ふ人、これぞ天下の王と謂ふなる、弱の強に勝ち、柔の剛に勝つこと、如此、

正言若反。

〔解義〕 強の弱に勝ち、剛の柔に勝つ、これ天下衆人の常言なり、弱は強に勝ち、柔は剛に勝つべしと云、正論は、常人の云所とは、反なり、衆人の耳に入らず、行ふものなきこと、宜なる哉、



七十九章

〔章意〕 この章、人の世に處る、勘辨薄く、吟味強くして、人を責め咎むるは、怨をとるの本なり、たゞ從容寛恕にして、よく人を容るべし、これ其一生心安き世を涉り、無難なるべきの道なることをのぶるなり、漢の司馬遷が、伍子胥の舊君へ父を殺せし怨を報せしことをしるして、怨毒の人に於ける、甚しき哉、君の臣に怨まれぬるすら、いかんともすべからず、實に懼るべきものなることをのべたり、釋迦如來云、今世にかすかなる怨も、猶いつまでも消亡せず、未來世にはいとゞはげしき怨となり、生々世々對生して、むくいゝて止む時なしと説けり、章内專怨をとることを戒

む、これ聖賢禍難を未然に防がしめらるゝ、深切の明訓なり、

和大怨、必有餘怨。安可以爲善。

〔解義〕 それ小火は、唾にても消すべけれども、大火となりては、水打ちかけて消し得るとも、必火氣残りて中々熱きものなり、以上人の怨も亦然り、大怨に至りては、たとひ中に扱ふ人ありて、一旦和解して、面を革め、うつくしくみゆとも、心の底はとけやらず、必怨の餘るものなり、これなんぞ善とすべけん、只始めより人の怨なき様にすべきなり、

是以聖人執左契、而不責於人。

〔字訓〕 契は手形なり、一枚を二つに割り、左契は借りたる者持



ち、右契は貸したる者持ち、左契は引き合はせる爲までの物なり、右契はそれにて責はたるなり、故に執左契とは、人を責めざること云なり、この解、今他説に従ふ、王註と異なり、

〔解義〕 それたゞ始めより人の怨なきにしかず、是を以て聖人の世を涉り玉ふは、人の心の同じからざることは、その面の異なるが如し、いかで我にひとしき人あらん、人の届かぬを見のがし、人の至らざるをきゝすてにして、譬へば物のかりかしに左契を持ちたる者の如く、人を責め咎め玉ふことなし、因て人より怨をうけ玉ふことなく、人の和ぐ心を得て、心安き月日を過ぎ玉ふことなり、

### 有徳司契。無徳司徹。

〔字訓〕 契は左契のことなり、上文に照して省けるなり、司は頭取るなり、主とすることなり、徹は明なり、人の過惡を目につけ見出すなり、

〔解義〕 有徳人は、その量廣くして、よく人を容れ、左契を持てる如く、人を責めとがめだてし玉ふことなし、無徳人は、勘辨薄く吟味強くして、人のとゞかぬをさがし、人の至らぬを見出すことを主とするものなり、

### 天道無親。常與善人。

〔字訓〕 與は助くるの意なり、善人は即有徳者のことなり、

〔解義〕 そもく、天道は私なきものにて、誰をとり分け親しみ玉ふことなく、たゞ常に善人を助け玉ふことなり、されば、勘辨



厚き人は、人の怨少きのみならず、天道も亦助け玉ふものなり。

### 八十章

〔章意〕 この章は、老子周の末に生れ、當時文勝ち事繁く、人貪り求むる風儀となり、終に天下騒がしきに至ることを目撃して、清淨無爲の治を施し、文を止め事を寡くして、上古聖人の時の如く、上下もろ共に和樂せる世に返さんことを思ふてのべたるなり、門人大脇寅之助、國學に精し、嘗て云、國學に所云、全く老子の説に同じと、想ふに我邦神代の昔も、かゝる風儀なるべし。

小國寡民。使有什伯之器而不用。

〔字訓〕 什伯即十百なり、假り用ゐたる字なり、十百の器とは、十

品百品、少しばかりの器物なり。

〔解義〕 世は次第に文勝ち事繁くなりゆきて、昔一つにて足りし器も、後には三つ五つも具へもち、猶それにても足らずとすることにはなれり、かくては物の足るときなきし、もし國を治むるに清淨無爲の化を以てするとき、は文なく事寡き風俗となり、たとひ土地つまり人民寡く、物事不自由なる處たりとも、人貪り求むる心なきのみならず、その具へ持ちたる纔十品百品の器も、それ猶用ゐるに及ばずして、事足るやうにあらしむべし。

使民重死而不遠徙。雖有舟輿。無所乘之。雖有甲兵。無所陳之。



〔字訓〕 甲兵は軍兵を云なり、

〔解義〕 それ民は貪り求むるが故に、利のかせぎには死をもいとせずして、住みなれし里をはなれ、海山越えて知らぬ他國へも行くことなれども、今その民をして貪り求むることなからしめて、死を重んじて身を自重、他所他國へ徙ることなからしむべし、それ舟車もて通ふは、求めあればなり、甲兵もて戦ふは、食ればなり、今は求めなく貪ることなければ、舟車あれども、乗りて外へ行くことなく、甲兵あれども、陳ねて人と戦ふことなからしむべきなり、

使人復結繩而用之。甘其食。美其服。安其居。樂其俗。隣國相望。鷄犬之聲相聞。民至老死不相往來。

〔字訓〕 結繩は易にも出づ、上古は文字なし、約束とは、繩を結びて心覚えとせしばかりなりと云へり、相望とはつゞくことなり、相聞とは至て近きを云なり、

〔解義〕 されば下の風儀をも一變して、民をして事寡く僞少にして、繩を結びて用ゐるのみなれども、その約束に違ふものなく、上代の如き世とならしめ、藜の羹を甘しとし、麻の衣を美なりとし、はにふの小屋を安しとし、野の末山の奥も、住めば都、足れりとして、餘所を羨み思ふ心なく、貪り求むることなければ、隣國相望みて、人の住家程近く、雞犬の吠ゆる聲相聞ゆる程なれども、それなほ年老い身罷るまで、たがひに往來することなく、閑にして安からしむべし、これぞ上代神聖の世のすがたなる、



### 八十一章

〔章意〕 此章老子一部の結局なり、そもく老子教の主意は、己を修むるに虚を以てし、世を渉るに不争を以てするを第一義とす、故にこれを以て卷尾とす、亦丁寧深切の意なり、

信言不美。美言不信。

〔解義〕 殊に若く容よき人の言うるはしきは、忘れがたく思はるゝものなりと、然、以上徒さはいへ、眞實の言は、美しくかさらず、美しくかされる言は、眞實ならざるなり、

善者不辯。辯者不善。

〔解義〕 萬の咎あらじと思はゞ、言すくなからんにしかずと、同されば善者は多辯ならず、多辯者は善者ならざるなり、

知者不博。博者不知。

〔解義〕 一生の内に要とあらまほしからんことを案じ定めて、その外は思ひ棄て、一事を勵むべし、同とも云へば、知者は只我いるべき肝要のことを知りて、その餘の事に博く渉ることはせざるなり、もしいる事いらざる事、の分ちなく、取雜博く渉る者は、心外馳して肝要の事に疎し、知者にはさせることはあらざるなり、後世陸象山王陽明の學、朱子を指して支離となし、ただ吾心を主とするの説、知者不博の意に近し、

聖人不積。既以爲人。己愈有。既以與人。己愈多。



〔字訓〕 不積、舊解、虚のこと、す、吳澄亦同案なり、只下文虚のことにて説きがたし、故に財のこと、す、既に盡なり、

〔解義〕 聖人は己に財を積聚せずして、盡く以て人民の爲に用ゐるなり、己愈有るなり、盡く以て人民に與へ玉ひて、己愈多くあるなり、國は君の國なり、故に國豊なれば即君の豊なるなり、故に己愈多しと云、「仁徳天皇の御詞に、民の富めるは即朕の富めるなりとの玉ひたるは、即このことなり、世に稀なる難有御詞なり、唐の陸贄曰、散小儲、成大儲、盡く以て人に與ふるは、散小儲なり、それにて國天下の富むは、成大儲なり、老子戰國の時、聚歟の慘なるをいたみ、卷末に於て、君民一體の義を述ぶ、其意極めて深切なり、

### 天之道、利而不害。

〔字訓〕 利は天の物を生じ育て玉ふを云、

〔解義〕 凡そ天の道は、萬の物を利し玉ふのみにて、害し玉ふことはなきなり、されば秋たち冬になり、百の草木のしほみ落つるも、天の殺氣を施して害し玉ふにはあらず、下より萌はるにたへずして、さきなる葉の落つるなり、たゞ生々して利するのみなるは、これ天地生物の心なり、

### 聖人之道、爲而不争。

〔解義〕 聖人の道は、無爲を以て爲して、人と争ひ玉ふことなきものなり、争は角ある物の角を觸れ牙ある物の牙を露す類なり、人にはあるまじきことなり、されば人君己を虚にし物と争



ひ玉はざれば、天下自ら平かなるべきなり、

〔餘論〕 吾儒に云、君子無所争、佛家亦不争と云へる由、今老子これを以て全部の結とす、その旨深矣哉、

老子講義終

五千之言非獨為闡今中事喜而後及我  
 上下有侍焉者可以備身可以煉性一の治  
 國多矣豈謂之異端哉孔子猶龍也  
 五泄也我牧山先生為侍講王為藩主  
 玄同公之日嘗進講老子之旨深乃  
 命先生自録達上遂為一書結欽羨之  
 去者事王為治十一年春若請其



原稿然先生不留存蓋溫樹之意也  
於乞收拾其零稿斷簡補綴接續僅通  
考之義以為十讀必如一畫遂騰寫一本按  
之文字錄之為證也今草書意字訓解義  
三項附之其餘論考者揮筆奇趣辨晰玄妙  
密之又密精之又精使後者起然而至  
洒然之域豈特當欽諸先生之梓公

于也而未果也墨肆靜觀堂主人之在  
先生之門口聽之確法自得整巾筆記者  
欲去之梓先獲我心乃出金騰寫本此較  
定正之孰能免夕服部士辰淺聖之龍  
按之請之此者力言抑平之之可取  
玄妙之相晰精密不待口授而瞭焉則于  
載之不朽矣讀者果以之為則備身



煉性江國之方亦求佗是手刻成  
主人未徵一言乃錄其真志以告讀者  
明治十七年甲申七月上浣

市塵靖藏併出



後序  
道德經二卷五千餘言自古舉異端者必以為  
稱首排之斥之往往累數千百言而僅僅五千  
餘言至今不泯滅者其必有以也嘗竊考以老  
子觀周室之末運故其說如此但其屬辭高妙  
幽玄其意有不易窺測者焉雖然善讀者深味  
有得未必不為救時處世之用也後世注者十  
數家率徒玩高妙幽玄之辭不詳其意所在於  
是清談脩養人觀其弊不察其所因排之斥之



終不一得其用。竊為此書惜。此秋奮藩侯好道  
德經家翁之嘗侍于經筵也。命而講之。乃錄講  
義若干卷。而上之。事在二十餘年前。各聞當時  
封內治平。上下和睦。蓋雖曰由明良遭遇。此書  
未火。不為裨補也。然則或稱害道甚。或稱慘礪  
少恩者。非深知老子者也歟。  
明治十七年夏八月 成堂佐滕雲韶撰



方外居士書

跋

自古解老子者多矣。或混儒或混佛  
或混列莊諸子。夫儒自儒佛自佛其  
說皆異。老子異若夫列禦寇莊周特  
恬淡一途而已。生於老子蓋似而非  
者耳。乃屑之於混而一之。叩槃為自  
捫盃為月。無惑乎老子之益解而益  
不可解也。獨我牧山先生則不然。先



生儒者也其說四子六經純然粹然  
不毫雜異端之說而及其講老子則  
專求其本義不混儒不混佛又明辨  
列莊諸子之不同乃雖間有引及之  
者亦皆一時例證而其要終歸於因  
應變化蓋譬之庖丁之解牛因其固  
然導其却窾若然嚮然為刀騞然老  
子之所以為老子者於是乎見無復

往日之質之也門人侍講惟各有草  
記而又多其極詳備者書費三輪子  
郁亦從先生學見之大喜請公之于  
世先生乃使拱等參校刻成又命為  
之跋

明治甲申秋 門人服部拱謹撰





光緒甲申仲秋

李之鈞書



跋

世讀老子者之鮮也。余知之矣。其文簡約。而其意深遠。是以難曉。夫唯難曉。是以讀者之鮮也。我牧山先生。精於老子。其講之也。使學者立得其意。曩者爲藩主玄同公。著講義。余嘗欲請其稿本上之梓。先生不聽。會得茲編。同出於先生。乃請名講義。以附劄。余刻茲編也。非嘗欲射利而已。抑有故焉。余家累世以鬻書爲業。余承祖先之遺業者也。欲中興家聲者久矣。嘗自以爲商必有道。宜先讀書而索其道。而後爲商。亦何爲遲。偶參寥道人來。余乃問之。道人曰。然。商固有道。在定心焉。難哉。定心也。子欲得道。宜學佛老之道。商之道。與佛老之道無異。若不能得其道。必勿張商業。或有苦心焦思。遂傷肺肝也。余聞此言。不勝感銘。是余之所以入先生之門之原由也。癸未之春。先生講老子。余喜而聽之。至其第二十一章。道之爲物。惟恍惟惚。惚兮恍兮。其中有象。豁然而若



得大意。自以為獲玄珠矣。又以為讀書蓋極於此矣。爾來臨事。無大無小。莫有苦心焦思。而胸中常坦然。道人之言驗矣。於是始知老教之當貴也。雖然余非聞先生之講述。安得至於此。余既聞之。不忍獨享。欲使未學者又知此道。是余之所以請於先生而刻之也。余既刻之。亦可不一言以述其所見哉。夫老子之意。其要在使人知常道而心不動矣。故其為書。或述道之體。或明道之用。守其體。則有益於養生。用其用。則有利於百事。利矣哉。道是為跋。

明治甲申孟秋下澣

靜觀堂主人三輪文拜識

明治十七年三月二十一日版權免許  
 明治十七年十二月出版  
 明治二十六年七月二十九日增補再版印刷  
 明治二十六年八月三日增補再版發行  
 明治四十三年六月廿九日訂正改版印刷  
 明治四十三年七月十五日訂正改版發行

正價金壹圓



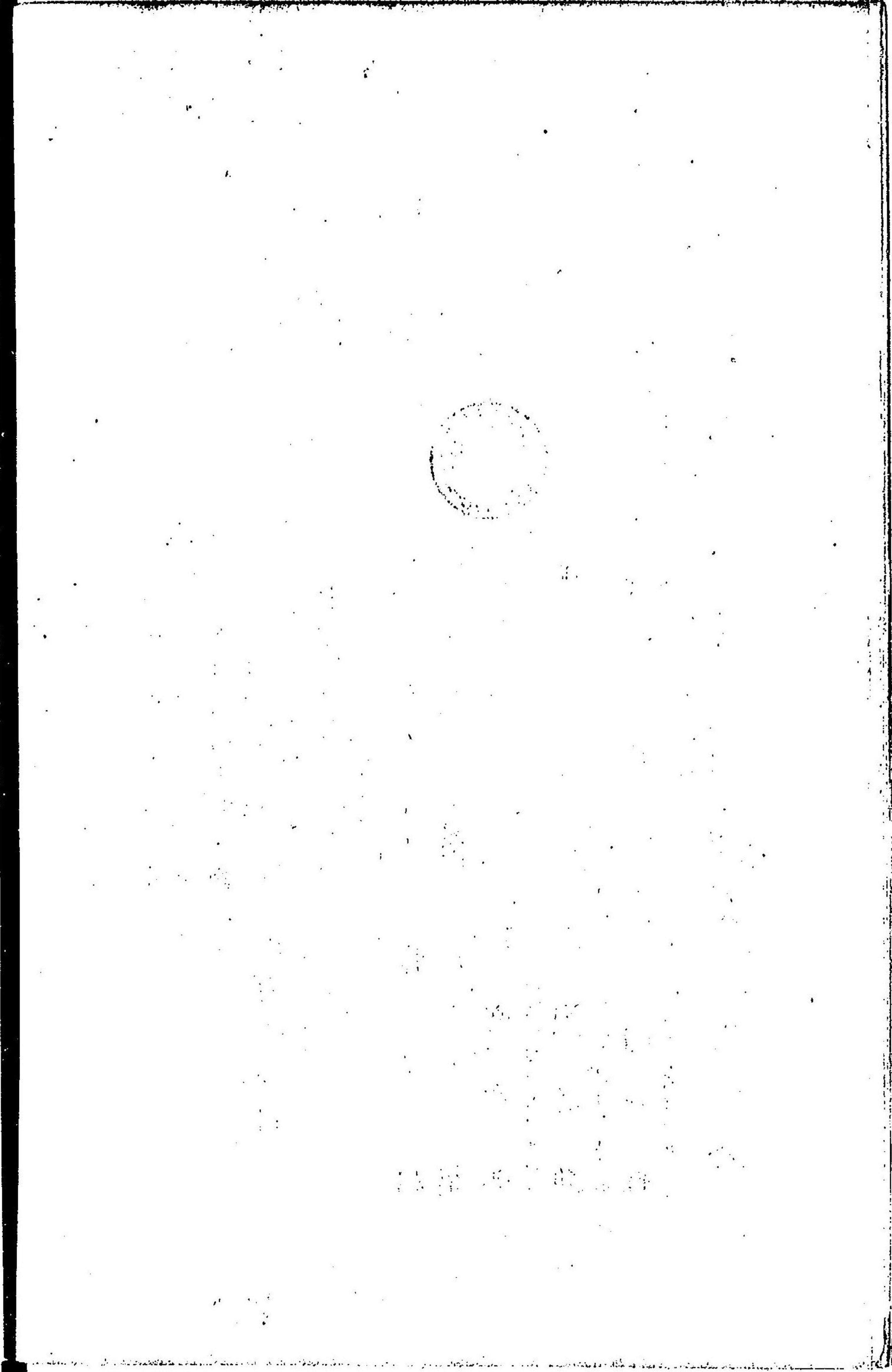
著者 佐藤 楚材  
 訂正者 佐藤 雲韶  
 發行所 三輪 文次郎  
 印刷者 永田 德之助  
 印刷所 東京市京橋區宗十郎町十五番地  
 合資社 東京國文社  
 東京市京橋區宗十郎町十五番地

發行所

東京市京橋區柳町五番地  
振替貯金東京(三百十番)

郁文舍

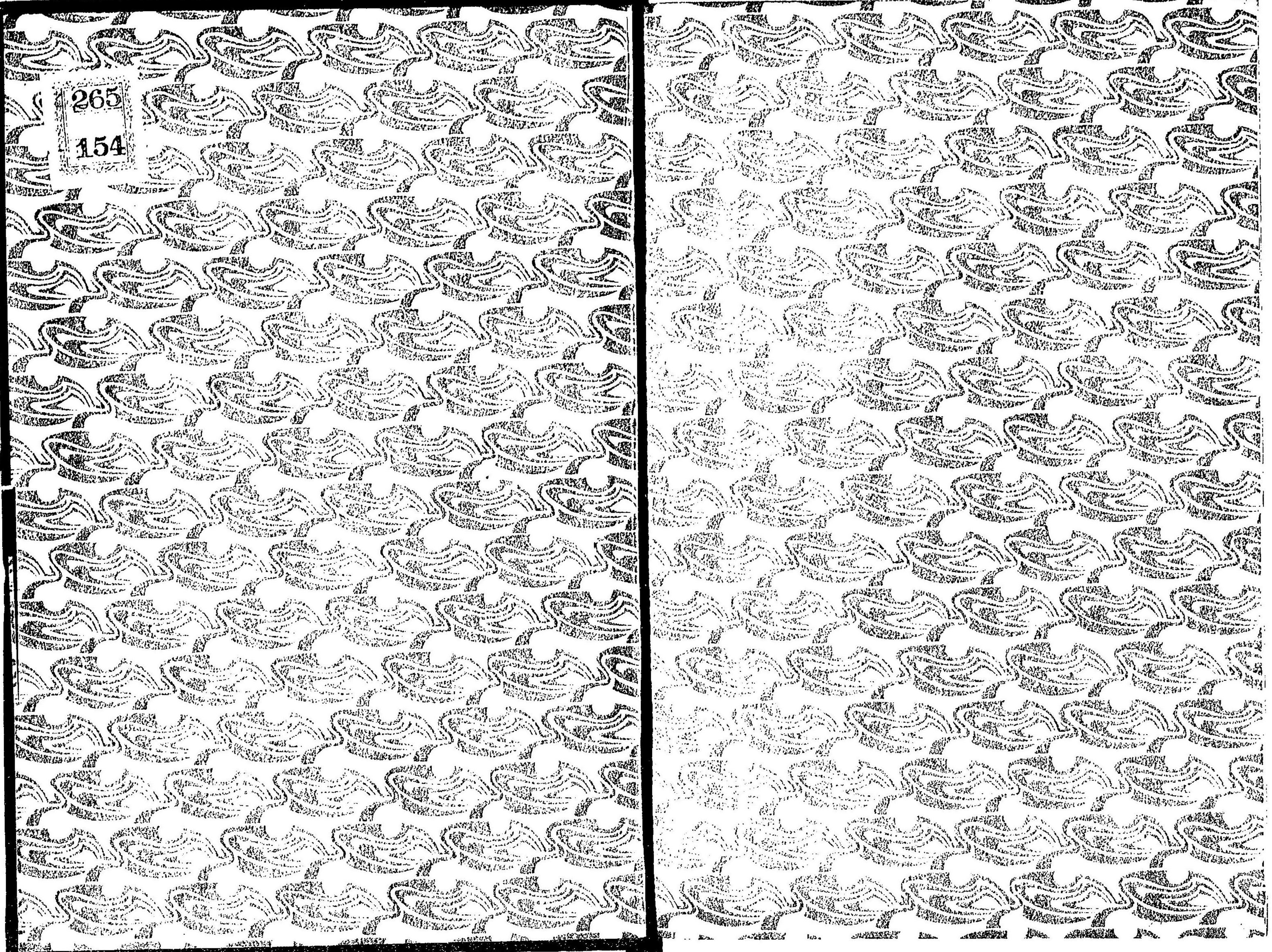




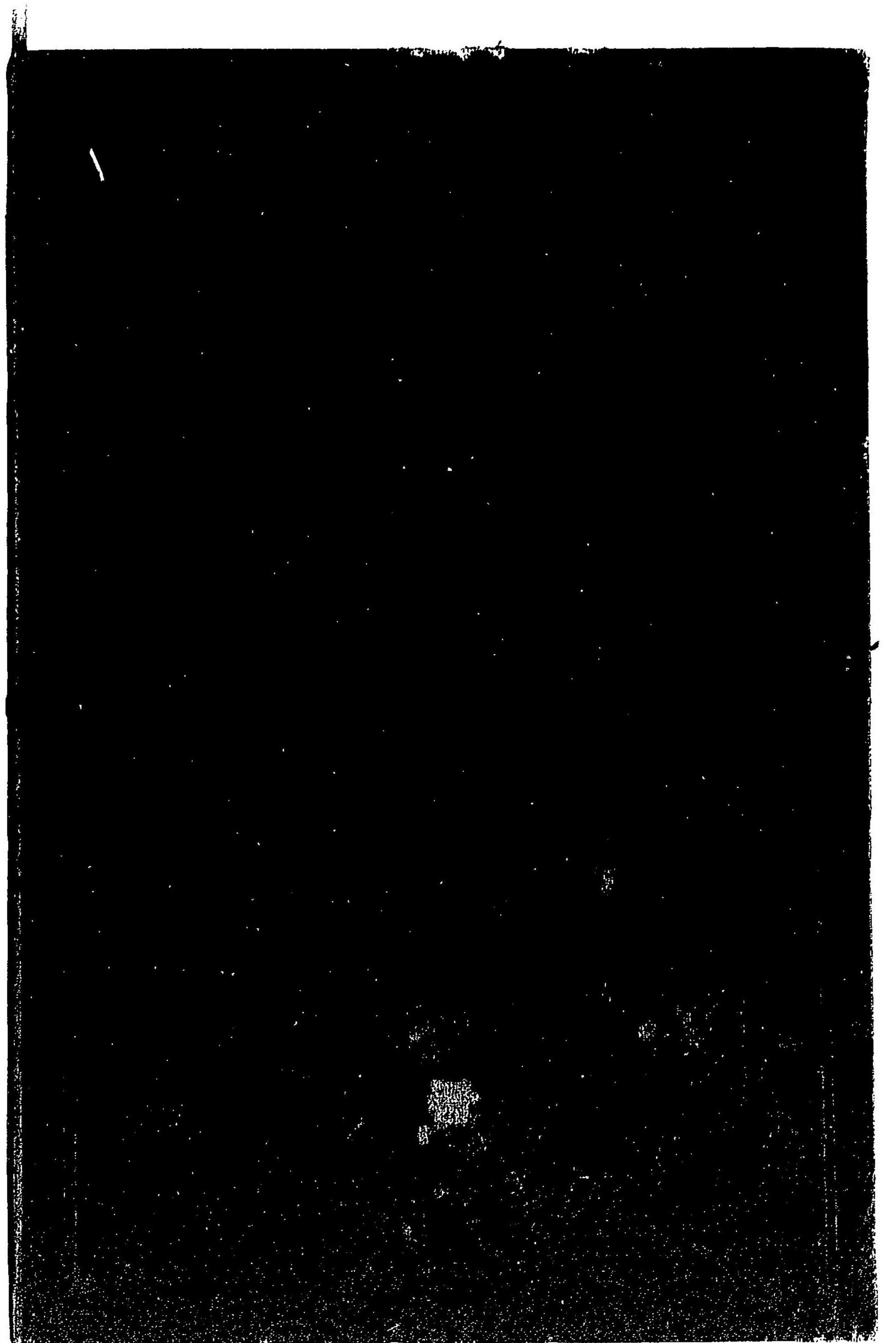


265

154









008330-000-4

特21-520

老子講義

佐藤 牧山/著

M43

AAC-0280





